

## インド・ウッタールプラデシュ州における日本人による社会開発活動(NGO) —その2 手押しポンプ設置事業、婦人会の活動について—

中嶋 裕子 中島 友子

### The Realities of NGO Activities Sponsored by Japanese Staff in Uttar Pradesh, India — Part 2: Hand Pump Project and Women's Empowerment Project —

Hiroko NAKAJIMA<sup>1)</sup>, Tomoko NAKASHIMA<sup>2)</sup>

Although India's economy is booming, poverty runs deep. A 2008 December government study found that the majority of Indian people live on 50 cents a day. At the same time, the number of dollar millionaires has increased to 100,000, according to government data. India's rigid caste system, a centuries-old social order under which status is inherited at birth, has long affected social attitude. Lower castes, along with Muslims and other tribal groups, make up nearly 70 percent of India's 1.1 billion people.

India is experiencing severe problems such as a widening gap between the wealthy and the poor, a severely discriminatory caste system, and malnutrition.

In order to help India cope with problems, many Non Governmental Organization (NGOs) support Indian people who are facing difficulties.

The author stayed at an NGO center operated by Japanese staff in Allahabad, Uttar Pradesh, for approximately one month in 1998. The center conducted a Non-Formal Education project, a hand pump project, an agricultural project and a women's empowerment project, among others.

This paper reports on the NGO's efforts to complete a hand pump project, and a women's empowerment project. Additionally, the paper describes the difficulties the Japanese staff encountered while working on these projects, and the staff's efforts to achieve their goals in light of these difficulties.

This article is a continuation of "The Realities of NGO Activities Operated by Japanese Staff in Uttar Pradesh, India, Part I: Non - Formal Education", issued in the Journal of Kinki Health Welfare University Vol.9, No2 (Serial Number 14) December, 2008.

Key words : NGO Activities in Uttar Pradesh, India, Japanese and Indian Staff, Hand Pump Project, Women's Empowerment Project

ウッタールプラデシュ州における NGO 活動、日本人スタッフとインド人スタッフ、  
手押しポンプ設置事業、婦人会の結成

1) 福山平成大学 (Fukuyama Heisei University) 〒720-0001 広島県福山市御幸町上岩成正戸117-1

2) 近畿医療福祉大学 (Kinki Health Welfare University) 〒679-2217 兵庫県神崎郡福崎町高岡1966-5

## はじめに

1990年代以降の順調な経済成長により、インドの都市部では富裕層が拡大している。一方、国際比較が可能な貧困の定義（1日1ドル未満での生活）によると、2000年におけるインド国内の貧困人口は人口比率34.7%の約3.5億人である。この人数は、世界の貧困人口約11億人の3分の1を占める<sup>1)</sup>。貧困線の設定において1,000万人単位でずれが生じるが、インドは世界最大規模の貧困者人口を有する国であることに違いはない。

表1 全人口に占める貧困層の割合(1990～2000年)

貧困線以下の人口 (%)			国際貧困線以下の人口 (%)	
全国	農村部	都市部	1日1\$未満	1日2\$未満
30.2	24.7	28.6	34.7	79.9

出典) World Bank (2007) World Development Report p384

拡大する人口と貧富の差に政府の援助が行き届かない地域の多いインドには、教育分野・開発分野で人的支援をしている非政府組織（NGO）が数多くある。日本の各種団体も国際NGOを標榜し、インドでの活動を展開しているが、それらの多くは寄付や現地NGOを訪問（スタディーツアー）という形で現地NGOに寄与するものであり、現地活動で生じている問題点などは見えにくい。

インド・ウッタラプラデシュ（UP）州、アラハバードにある農村総合開発センター（以下センターと省略する）は日本人により運営されている数少ないNGOの一つである。1965年に日本人夫妻が活動を始めて以来、農村開発活動が続いている。

筆者は1998年8月28日から9月26日までの約1か月間、そのセンターに滞在し活動を視察した。センターでは農業の指導者養成をはじめとした農業研修・研究だけでなく、NGO

活動としてノンフォーマル教育<sup>2)</sup>の実施、手押しポンプ設置事業、婦人会の結成、日本でのインド民族芸術の紹介及び販売などを手がけている。

ノンフォーマル教育の現状と課題については、拙稿近畿医療福祉大学紀要の「インドウッタラプラデシュ州における日本人による社会開発活動（NGO）—その1 ノンフォーマル教育の実施—」において報告した。インドにおけるNGOへの社会開発活動の期待と役割は大きいものの、その活動は困難をきわめている。本稿では同じくセンターで実施されている手押しポンプ設置事業及び婦人会の結成と成果について、それらの事業を実施する際に文化や価値観の違いから生じるトラブルについて、そして日本人がインドの農村で多くの困難に直面しながら活動を続ける姿を報告する。なお、文中のPMとはプロジェクトマネージャーである日本人女性を指している。

## 1. 対象とする農村の状況

インドの2003から2007年度までの実質GDP成長率は平均年率8.9%に達した。しかし表2に示すように、その成長率に比べると農業部門の成長率は2.3%と停滞している。これは緑の革命による農業生産性の向上や農業労働者の賃金上昇、公共食糧配給制度が行われた一方で、所有地のない農民が増大したこ

表2 インド経済と農業部門の成長率 (%)

部門	1992～1994	1994～1997	1997～2004	2004～2006
農業	5.0	4.6	2.5	2.3
工業	5.3	10.8	5.4	8.7
サービス	6.0	7.9	7.7	10.0
GDP	5.5	7.5	5.8	8.5

出典) Reserve Bank of India, Ministry of Finance, Central Statistical Organization の各種データより

小島眞「東アジアに接近するインド経済」毛利和子編『東アジア共同体の構築2』岩波書店 p300

と、非農業労働者の雇用機会が不足したこと、カースト差別による所得分配面の不平等が解消されなかったことなどが原因と考えられる<sup>3)</sup>。

インド内務省の統計によると生活苦のため自殺した農民は1998から2003年の5年間で10万248人と報告されている。戸主の自殺や一家心中が多発するのは農家が収穫を終えた時期である。これは零細農民は作付けから収穫までを借金で暮らし、収穫後に借金の一部を返済するのが通例であり、この時期に不作や凶作で苦境に立たされることが多いためである<sup>4)</sup>。

農業従事者が67%を占めるインドでは、工業化に伴う雇用吸収ではなく、農業の成長に伴う実質賃金上昇が必要であることは各研究者ならびに政府機関も指摘している<sup>5)</sup>。政府は生産性向上のために商業銀行や地域農村銀行、協同組合を通して農業融資を実施し、零細農家の利子負担を軽減し、また、農業協同局は、各州の農業大学と共同して農産物の生産性向上を図るため、灌漑整備と技術革新や農業技術の普及と指導研修を実施している。しかし、利子負担の軽減に関しては、絶対的貧困層の救済にならず、また、灌漑設備や技術革新は農地を持たない零細農民には救済の手段となりえていない。

## 2. 手押しポンプ設置事業

### 1) 事業の概要

インドでは農業用水に対する需要が増加し、国内水需要は2025年までに倍増することが見込まれるが、全国的に地下水の水位は下がっており、水不足は深刻である。これに対し、飲料水の確保事業は各州単位で行われ、中央政府は財政・技術面でその補助をしている<sup>6)</sup>。しかし、政府による補助は十分ではなく、指定カーストの村々には及んでいない。そのた

め水源や井戸の無い村が数多くあり、女性達は何キロも離れた川や井戸に水汲みに行く重労働を担っている。

表3 衛生設備設置状況

衛生設備を利用できる人口%		良質な水を利用できる人口%	
1990年	2004年	1990年	2004年
14	33	70	86

出典) UNDP (2008) Human Development Report 2007-2008

またたとえ村の中に井戸があったとしても、その井戸は、穴を深く掘って縁を石で固めているだけの構造であることが多く、縁からは泥水や洗濯水（井戸の周りで洗濯するため）などが流れ込み、底からは水泡が上がっていることもある。しかし村人は大腸菌などの菌を含むその井戸水を飲料水として利用するしかなく、その結果下痢や胃腸疾患など様々な病に罹患している。

そこで重労働から女性を解放し人々の生活を安定させ疾病予防と衛生状況の向上のための一助として、センターは井戸を掘り安全な水を提供する手押しポンプの設置（以下、センターによるものをポンプ事業と記す）を手がけている。この井戸1本の掘削には約3万ルピー（9万円）が必要となる。対象は手押しポンプを設置できる金銭的余裕のない貧しい指定カーストの村に限られている。適切な使用を喚起するためセンターは毎月5ルピー（15円）を村から徴収している。

ポンプ設置時には、家事などで水を使うことの多い、また男性と比較して出稼ぎに行かず村に残る確率が高い女性を中心に委員会が作られる。2～3回程度の会議が開催され、女性達は水質検査の結果から設置場所を決定し、ポンプの管理も行う。適切に使用すれば10年から20年は使用可能である。

## 2) ポンプ事業実施時における現地スタッフとのトラブルと対応

現地で活動をスムーズに行うためには現地スタッフを雇う必要がある。しかし、文化・思考・価値観の異なる現地スタッフと共に働くことは大変難しい。センターでもスタッフに対する対応が大きな課題となっていた。以下に、ポンプ事業実施にあたり問題となったスタッフの行動事例を報告する。

### (1) ポンプ事業スタッフの問題事例

#### ①現場責任者、Rによるトラブル

ポンプ事業の現場責任者は高カーストに属す現地人、Rである。ポンプ事業はオーストラリア人宣教師によって始められ、宣教師帰国後は当センターに委託継続されたが、Rは初期から事業に携わっていた。

#### ケース 1

Rが事業に必要な村に査察に行く、というのでPMと筆者は同行した。彼は、既にあるポンプの配置図の作成をPMに指示されていたが、3 か月経っても着手していなかった。

PMは日頃から「我々（センター）はハリジャン（指定カースト）を対象にしているので、高カーストの村を対象にポンプを設置してはいけない」と注意していた。しかし、筆者とPMが同行した査察でRが向ったのは高カーストに属する富裕層の村であった。村人はバラモン階級の象徴である紐を肩から下げており、村にはトウモロコシ畑が広がり、牛や、バッファローが計10頭も飼われていた。

この村には既に手押しポンプ3台と井戸が5本、ため池1つがあり、PMが支援を必要とする経済状態の村ではないことを指摘したが、Rは「ポンプ

は州政府が造ったもので自分達の所有物という意識がなく、使用不可能の状況である。村人の数は多くポンプの追加は必要不可欠であり、この村はハリジャンの村である」と反論した。

続いて、PMが村の状況を視察しようとする、後ろから村人が追いかけて、「そちらに行ってはいけない、何もなければすぐに引き返せ」と叫んでいた。進行方向前方に、手押しポンプを発見した。

その後、村の女性からの聞き取り調査により、村長は政府から支給される井戸掘りの助成金を自分の財産にしておき、不正隠蔽のために井戸を必要としていたことが発覚した。本来は対象となるべき村ではないのだが、Rは村に設置することを村長に確約しており村人たちにも周知されていたため、その時点での撤回は難しく、結局手押しポンプは設置されることになった。

Rは井戸やポンプの適切な設置場所や水質等を考慮せず、高カーストの人間に取り入り、自分の名誉と名声のために腐心していたことが露呈した。

#### ケース 2

Rには、仕事用としてバイクの使用権が与えられていたが、彼はこれを私用で利用するだけでなく、村々を回って井戸を掘ると村人に話し、村人から不正に手数料を徴収していた。村の人々が「莫大な手数料を払ったにも拘らず井戸を掘りに来ない」とセンターに苦情を言いに来たため不正が発覚した。

この種の不正は幾度となくあり、彼は以前のオーストラリア人宣教師にも一度解雇されたが、改心したとして再

雇用されていた。再雇用の理由には、アウトカーストの村に入って働く高カーストに属する人材が不足していること、またそれまでに便宜を図ってもらった人々からの強い要望があったことがあげられる。

#### ケース 3

Rはポンプ事業と共に、保健衛生プロジェクトにも関わっている。保健衛生プロジェクトのためにC村に行くというので筆者はRと同伴し、途中で医師を乗せた。村に着くと拡声器で人々を集め、「調査」としてRは村の人に健康状態などを聞いた。医師が同行した理由は不明であり、医師は調査の間一言も発さず診療もしなかった。その医師に支払われた金額は400ルピー(1200円)で、現金はその場で支払われた。村人は月1200ルピー(3600円)で生活しているので相当な金額である。

#### ケース 4

RはD村で女性医師と保健師を伴い、ビデオ教材を用いた保健衛生の講義を予定していた。そのために、Rが持ち出したビデオ機器はセンターの備品ではなく、隣接する大学から有料で借り出したものであった。さらに村では、電力不足のためか接続が悪かったためか、結局村人はビデオを見ることができなかった。無計画な行動により予算以上の経費が無駄になった。

Rはマイクを使わずとも参加者に十分声は届いたが、マイクを使用し、大音量に誘われて村の大人と子どもをあわせて約100名が集合した。Rと村長がそれぞれ挨拶した後、保健師と医師がエイズについて、家族設計、衛生管理について話した<sup>7)</sup>。医師は保健師と同

様の内容を話しており、医師の役割である診察はなかったため医師の同伴理由は不明であった。また炎天下での1時間にわたる講義であったため参加者は注意散漫になっていた。

2時間30分の長すぎる昼食休憩後、再び保健師が話を続けたが、プログラムの内容の悪さや準備不足のため、参加者は約20名しか集まらなかった。

講義をした保健師は違う団体に所属しており、その団体から派遣されていたにも拘らず、Rは保健師に謝礼を支払っていた。さらに医師には1500ルピー(4500円)も支払っていた。PMが雇った医師であれば340ルピー(1020円)で済む上に、今回は必ずしも医師でなければならない内容ではなかった。

Rはセンターに戻った後、「医師には20ルピーから40ルピーしか払っていない」とPMに報告したが、会計の時点で不正は露呈した。Rは自分の面子や名誉のために不必要な資金を浪費していたのである。

#### ②スタッフYによるトラブル

スタッフYは、多額の借金を重ね、取立てから逃れるため3か月間無断で欠勤していた。その後出勤した際、病欠だったとして欠勤期間中の給料を要求したがPMに却下されていた。村への査察時に同行したがその時も借金の取立てに怯えていた。

彼はセンターに保健師として雇われていたがRの傍にいただけで保健師としての役割を果たしていなかった。

#### ③見習いスタッフAによるトラブル

インドは失業率が2000年で9.79%と高く、大学を卒業しても就職できない者が多い。スタッフAも、大学を卒業して1



～2年定職につくことができなかったがその年就職が決まった。見習いであったが、毎日遅刻していた。村への査察日にも遅刻し、査察のメンバーに加わらなかった。次の日も遅れて来たが、筆者らが車で村に向う途中に出会い、査察に加わった。PMに遅刻を責められても、「私を連れて行かない方が悪い、朝にはセンターに行ったのだ。今日遅れてきたのは、家が遠いからだ。仕方がない」と口答えしていた。通常バイクで行くところを、バイクに乗れない彼のために倍以上の燃費を必要とするジープを使用しているのに、「感謝」の気持ちはなさそうである。彼は工学部出身でメカにも強いと思われるが、仕事上必要な自動車・バイクの運転、修理ができず、学ぼうともしていなかった。見習いの態度とは到底思えないが、このような態度の人は珍しくない。

## (2) スタッフのトラブルに対するセンターの対応と苦悩

Rの事例はほんの一部にすぎない。度重なる不正に耐えかねたセンターは一度Rを解雇した。しかし、それが重大な問題を引き起こした。Rは不当解雇だとしてセンターを裁判所に訴え、PMも裁判に引き出されることとなったのである。

正当な解雇とされるはずが、判決はRの勝訴となった。Rの、「私は、村のために身を粉にして働いてきた」という言葉が、Rに様々な便宜を図ってもらったブラーミン、バラモン（高カースト）の人々によって裏付けられたためである。このように正義は金の力と政治的発言権によって左右される現実がある。

スタッフYに関しては、保健師としての役割を果たしていないためPMは解雇を希

望していたが、外国人がインド人を解雇すればセンターの運営に支障をきたすほど非難・中傷が続くため難しいということであった。

以上に紹介したスタッフは高カーストに属する人々である（高カーストの人々を非難するものではない）。高カーストの人々を雇用するのは下層カーストの人をスタッフに雇うとそれ以上の上層カーストの村に入る事は許されず、査察や指導に支障をきたすからである。

スタッフの振る舞いは筆者には自己中心的で無責任と思われたが歴史の中で培われた文化や慣習の違いもあり、一概にはいえないのかもしれない。歴史・文化、価値観の異なる人々と活動するには筆舌に尽くしがたい努力と信念が必要になることを認識させられた。尚、他部門スタッフの問題事例に関しては後述のアラハバード体験記に記した。

## 3) ポンプ事業の成果

以上で述べたとおりさまざまな苦労はあったが、ポンプ事業によって清潔で安全な水を日常的に飲めるようになった村人の衛生に対する意識は向上し、罹患率は明らかに減少している。このようにポンプ事業は人々に受け入れられ今も多くの人に恩恵をもたらしている。

## 3. 婦人会の結成

前報でも述べたように、都市部の上層階級の中には政治的な発言力を持ち、社会的に活躍している女性が存在するが、その割合は数パーセントにも満たない。一般的にインドにおける女性は社会的・伝統的に抑圧された存在であり、発言権も無く、自尊心を傷つけられ、虐げられている。

このような状況は女性だけでなく男性にも

不利益であり、社会の発展を阻む。村人の生活向上のためには、女性のエンパワメントが不可欠である。そのため、センターは婦人会を結成した（女性のエンパワーのために指定カーストの村に限らず結成している会）。婦人会活動として、生活改善のための衛生教育、栄養指導や識字教育など多岐にわたる。これらの試みにより女性は自尊心を獲得していく。

### 1) 婦人会のプログラム

婦人会は申し込み制で一村につき毎年10人と制限している。活動は週に2回で、家事・労働の合間の時間である午後1時から3時30分まで行われる。場所は、インストラクターの家の路地や軒下などさまざまである。

黒板やチョーク、テキストなどの教材費だけでも全体で500ルピー（1500円）かかり、一人2ルピー（6円）の月謝では採算は取れないが、センターでは村の女性のエンパワメントのために婦人会事業を継続している。

インストラクターは前報のノンフォーマル教育の教室で優秀と認められた女性である。彼女達は、時々無断で欠席したり、子どもの世話で遅刻することがあるが概ね責任感のある人達である。

カリキュラムは表4示したように公衆衛生、母子保健、家庭菜園・栄養学、裁縫、識字と、季節に合わせて組まれている。1～3月の公衆衛生では、牛を一所に飼っていると病気が伝染しやすいこと、牛糞を一所に集めることや排水溝をつくることを教え、4～6月には牛糞を家庭菜園の肥料として、排水溝は灌漑

として役立てることを教える。家庭菜園では、センターが種を1パッケージ2ルピーで販売し、インストラクターが5種類の野菜の育て方を教えていた。10月は家庭菜園の野菜を収穫し、それを基に11月に栄養について学ぶ。

特に公衆衛生は、途上国で医師のいない地域を対象にした「THERE IS NO DOCTOR」という保健衛生の本を用いて教えている。さらに月に一度は課外活動として、市内見学やセンターでの母子保健に関するビデオ鑑賞なども実施している。

このような学習の成果は、井戸水を煮沸したり、布で濾して飲料水にするという行動や、新生児に覆いを被せている姿にも表れていた。一方、2000グラム程の低体重児と思しき新生児をラタンの上に寝かせ目や鼻、口に蠅をたからせたまま不在の母親もいた。こちらの蠅は噛むのか、止まられると痛みを感じる。学習を生活に生かせるようになるには時間がかかることを感じさせられた。

### 2) 婦人会をめぐるトラブルとセンターの対応

査察に訪れた際、婦人会は村の人々に認められて活動していたが、婦人会をここまで築き上げるためには多くの抵抗と衝突があり、その都度大変な努力を要した。男性のみならず、男性の反対を恐れ、また変化を恐れて婦人会の結成に反対する女性も少なくないためである。ある村では男尊女卑の観点から「女性が知識をつけると村に良くない事がある」、あるいは「センターが女性を集めてどこかに売ろうとしている」といった風評が広まり、

表4 婦人会の学習カリキュラム

1～3月	4～6月	8～9月	10月	11月	12月
公衆衛生	家庭菜園	公衆衛生 (雨季で病気が発生しやすいため)	家庭菜園	栄養	母子保健（初潮、妊娠、出産、予防接種について）

センターに村の男性らが農具を持って詰めかけたことがあった。

その度に女性が知識をつけることでもたらされる利点や開催の主旨、家事の合間に活動することなどを説明、説得してやっと結成された。

しかしこのようにして結成された後も問題が続発した。そのうちの一つに婦人会会員の夫らが徒党を組み、わずかな月謝の支払いを拒否し、インストラクターに凄み、怯えたインストラクターが辞めてしまったということがあった。そのまま解散となってしまった村もあったが、PMが教育には月謝以上の資金を投資していることを説明し解散を申し伝えたところ、村長が婦人会の意義と恩恵を理解したうえで自分達の非を認め、月謝を2倍支払うから婦人会を再開して欲しい旨を伝えてきた村もあった。一度婦人会のプログラムに参加すると村人は婦人会の必要性を認識し始め、村自体も変化し始める。この村ではその後30年続き、衛生状態も向上している。

#### 4. 各事業の課題と展望

##### 1) ポンプ事業にみられるカースト制度から生じる人材不足

ポンプ事業では、専属スタッフの度重なる不正に悩まされていた。しかしその不正によって利益を得る人々が存在するため、裁判等により断罪し解雇しようとしても、解決につながらないばかりか時には日本人スタッフの命を危険にさらすことになる。

この問題の根底にあるのは人材不足である。査察や指導を行うためには、識字を獲得したある程度の教育を受けた人を選ばなければならない、必然的に高カーストに属する人を選ぶことになる。しかし選ばれるのは、プロジェクトが対象とするアウトカーストの人々に対して差別意識のない人ばかりではない。長く

受け継がれてきた穢れの意識、差別意識などは簡単に解消されるものではない。そのような状況の中で、親身に貧困層の人々の生活向上のために働くという意識教育を行い、人材を確保するには相当の時間と労力を必要とするであろう。低カースト出身のスタッフを養成することも必要であるが、現実には厳しい。

カースト制度が歴然と存在するインドにおいて人材の養成と確保、人々の意識改革と課題は多いが、センターでは、将来村の農村開発指導者をめざし、地方出身の研修生が学んでいる。徐々にではあるがセンターの活動が根付いている。

##### 2) 婦人会活動の充実

婦人会の結成、女性のエンパワメントについて男性からだけでなく、女性自身からも反対の声が多かった。女性が識字を獲得することで、また知識を得ることで村に災難がふりかかると信じられていた。十分な理解が得られない中での活動であったが、識字活動、菜園活動、衛生活動を通じて罹患率は減少し、村が活性化していくという経緯の中、男女両性の、村全体の理解が得られるようになった。村人の生活に密着し、成果を実感できる工夫されたプログラムによるものである。村人の無理解に、信念を持って根気強く対応したセンターの賜物であろう。無理解に対し命をかけ毅然と対応するPMの姿勢によるところも大きい。多くの人が学習内容を生活の中に十分に生かせるようになるにはまだまだ時間がかかるであろうが、その一歩となっていることは明らかである。

今後いかに学習したことを生活に生かすか、活動を発展させるかが課題であろう。また、一つの村の成果を他の村に伝え、活動をつなげていくか、連携の方法も求められている。

##### 3) 価値の相違、慣習の違いから生じる問題 異文化の中での活動には価値観の相違、手



続きの方法、人とのネットワークの作り方などにおいて難しい点が多い。価値観の相違に関して、身分差別を「人道的問題」ととらえるか否か、虚偽の報告や申請を「不正」ととらえるか否かという事がある。手続きに関しても手数料（いわゆる賄賂）が必要なときもあり、書類や手続きに問題がなくても地縁や紹介などがなければ全く物事が進展しないことも多い。受け入れ難いことは多いが、その土地の慣習を拒否するのではなく、またそれに巻き込まれないバランス感覚が大切であろう。外国人だからこそ見えることがあり、できることがある。

### おわりに

IT産業で世界のトップを走るインドでは輝かしい経済発展を見せる一方、貧困層、疲弊する農村との貧富の差が拡大しており、貧しい者はより貧窮し、数多くの犯罪が増加している。

センターでは貧困層の人々の生活向上のために様々なプログラムが用意されていた。その道のりは決して平坦ではないが、地道に活動が続けることで成果を上げられると知ることができた。NGOによる地道な活動は貧困の連鎖を切る一助となり、安定した社会の形成に寄与する。

世界の縮図ともいえるインドにおけるこのような農村開発の施策は、他国の農村開発の方法に示唆を与えることができるであろう。

本稿では、インドUP州アラハバードの農村における貧困層の人々の生活向上のために支援活動をする日本人の姿と、彼らの活動の一部であるポンプ事業と婦人会の活動内容を報告した。結果として各事業の実施時のトラブルを中心に報告することとなったが、それだけ異文化での協力活動の実施は命をかけたも

のであり、多くの課題を抱えているということである。本稿において、スタッフについて一方的な視点で書いたことは否めない。憤慨させられる振る舞いをするスタッフがいる一方、村の人々の生活向上のため、強い責任感と使命感を持ち活動しているスタッフや研修生達がいたことも記しておきたい。センターで寝食を共にしながら農業について学んでいる20名程度の研修生は、知識を蓄積し故郷に持ち帰り、自分の身は減びても故郷に尽くす目を輝かせて語ってくれた。

筆舌に尽くしがたい困難に見舞われながらも貧困層の人々の生活向上を天命として活動している人々に改めて敬意を表したい。

日本人夫妻によって発足した農村総合開発センターは現在も有機農法を中心に持続的な農村開発に関わっている。

混迷する国際関係の中、国の利害を超えて人道的な側面で活動するNGO活動はその役割をますます高めている。この論考が少しでもNGO活動の理解を深める一助になれば、そして、国際貢献を志す人の決意に貢献できれば幸いである。

尚、本稿は10年以上前、筆者が21歳時に記した記録を元に作成した。最後に余録として体験記を紹介させていただく。感じ方に幼さや未熟さが表れているところが多々あるが、当時の心の動きを大切にしたいためそのまま記載した。インドに住む人々を中傷するものでないことをここに記しておきたい。

### 注釈・引用文献

- 1) World Bank (2007) World Development Report pp. 384

尚、同年のインド政府が定義する貧困人口比率は26.1%で貧困者数は2億6000万人であった。

- 2) Ministry of Human Resources Development Department of Education: Report of the working group on elementary education non-formal education early childhood education and teacher education for the ninth five year plan, Indian government, New Delhi, 1996
- 3) 内川秀二: 総論—経済改革後のインド経済。9-20, 辻田祐子: 貧困削減プログラムの現状と課題。168-201, 内川秀二編, 躍動するインド経済—光と影。アジア経済研究所, 2006
- 4) 伊藤洋一: ITとカースト インド・成長の秘密と苦悩。日本経済新聞出版社, 2007
- 5) 黒崎卓・山崎幸治: 南アジアの貧困問題と農村世帯経済。67-96。  
木曾順子: インドにおける労働者のゆくえ—年労働市場の実態と変化—。215-246, 絵所秀紀編、現代南アジア 2 経済自由化のゆくえ, 東京大学出版会, 2002
- 6) Indian Government Economic Survey 2006-2007  
飲料水提供プログラムの資金は、2004から2005年で290億ルピー、2005から2006年で406億ルピー、2006から2007年では520億ルピーと増額された。第11次5カ年計画では、中央政府が地方の飲料水確保を目指す、農村地方飲料水提供プログラム (ARWSP) の実施を計画している。これまでに6600億ルピー以上が出費され、420万の手押しポンプと21万のパイプが地方に整備された。政府は、ポンプ・パイプの修繕・維持費として年間600億ルピーを費やしている。しかしながら、砒素・塩分・フッ化物・鉄などで汚染された水を飲料水として使用している家庭が19万5813世帯もあり、早急な対応が望まれる。

- 7) 15歳から35歳までをターゲットに小家族の利点を教えるため、村から村へ325家族を25から30日で訪問指導している。実際には10%の男性がコンドームを装着し、10%の女性が薬を服用している。

## 参考文献

- ・ Census of India 2001, <http://www.censusindia.net>
- ・ Government of India, Ministry of Women and Child Development, <http://wcd.nic.in/>
- ・ Gender Budgeting in India, <http://indiabudget.nic.in>
- ・ Ministry of Health & Family Welfare, India, <http://mohw.nic.in>
- ・ Ministry of Human Resource Development, Department of Women and Child Development, India, <http://wcd.nic.in>
- ・ Ministry of Rural Development, India, <http://rural.nic.in/>
- ・ Ministry of Social Justice and Empowerment, India, <http://socialjustice.nic.in/>
- ・ Ministry of Urban Development and Poverty Alleviation, India, <http://urbanindia.nic.in>
- ・ Planning Commission, India, <http://planningcommission.nic.in/> Eleventh Five Year Plan 2007-2012
- ・ Ministry of Personnel, Public Grievances and Pension, India, <http://persmin.nic.in>
- ・ Mithu Alur: Some Cultural and Moral Implications of Inclusive Education in India—a personal view Journal of Moral Education (30) No.3, 287-292, 2001
- ・ Nidhi Singal: Inclusive Education in India: International concept, national interpretation, International Journal of Disability, Development and Education 53 (3), 351-369, 2006
- ・ Sen, Abhijit and Himanshu: Poverty and

Inequality in India-I Economic and Political Weekly, Sept, 18: 4247-4263, 2004

- ・ UNDP (2008) Human Development Report
- ・ World Bank (2007) World Development Report

## 余録：アラハバード体験記

インドは一年中雪に覆われているヒマラヤから、横断に何日もかかる砂漠地帯、何千という少数民族の住む山岳地帯、一年中亜熱帯で三毛作もできる南インドまで自然環境も違えば、民族・宗教・言語・文化も異なる人々が住む国である。その極めて多様性に富む国を「インド」とまとめて語ることはできない。筆者の滞在したアラハバードにおいても同様に宗教も母語も異なった多種多様な人々が存在しており、断定的に語ることはできないが、筆者の体験した範囲で体験を記す。

### A 人間模様観察

#### 1) スタッフの問題事例

##### ①教育プロジェクトスタッフS

PMと共に教育プロジェクトに関わっているSは、PMの話によれば農業関係の大学院まで出ているが、農業の指導に従事する能力は持ち合わせていない。金銭管理は細かいので、教育関係の資金係を任せられている。しかし、センターの備品であるとわかっていても自分の机に入れ、鍵をして私物化してしまう癖がある。NGOスタッフとして長年勤めておりPMの運営方針を理解し、PMの補佐役を担っている。ノンフォーマル教育のインストラクター査察時にも同席していた。

##### ②農業部門担当のスタッフM

もう一人のスタッフ、Mはバラモンの階級であり村長でもある。彼は指定カーストの村を訪れ、農業指導を行っている。

Mもまた、センターの規則を守らないスタッフの一人であった。職員は、朝9

時にセンターに集合して、朝の会議終了後村を訪問するという規則がある。しかし、Mの家はセンターと村の途中にあるため、無駄な往復をしたくないとの理由で朝の会議には出席しなかった。何度注意しても朝の会議を欠席するのでタイムカードを導入し、会議の欠席は欠勤扱いという事にした。2～3年の攻防の末、朝の会議に出席するようになったが、数か月後はタイムカードによる牽制も機能しなくなり再び遅刻は常習化した。

彼の家はM御殿と呼ばれ、地域では有数の富裕者である。しかしセンターには貧乏だからと言い、金を無心する。

村の家には塀がないが、M御殿には塀だけでなく門もある。通路を進むと御殿があり、その先には村が見えた。不思議な光景であった。村を塀で囲っているという事だろうか。

#### 2) 無為に過ごしているように見える人々

「一体何をしているのですか？」筆者は何度もこの質問を街の人々に尋ねたくなった。町のチャイ屋にはお茶を飲んでいる男性、賭け事をしている男性が非常に多い。失業中で家庭の仕事は全て女性に押し付けているのだから暇なのだろうと解釈したが、官庁内でも同じような光景が見られたのには驚いた。政府刊行物を扱っている官庁内でも男性は円陣を組んで、たわいもない話をしていたのである。官庁に入るには、身分審査らしきものがあるので、彼らはなんらかの責務を持つ、雇われ人であるはずだ。しかし、厳しい日差しを避け、屋根の下にたむろしていた彼らは2時間以上その姿勢のまま動いていなかった。

はるばる日本から来たということで特別扱いで入れてくれた官庁の建物の中には、何か分からない資料が大量に積まれていた。

まるで再生紙工場の中に居るようであった。その中に埋もれるように、何人かの女性と男性が見えた。「州における人口推移や就学率の資料が必要なので出してください」と頼んだのだが、探してくれている様子が見られない。2～3度依頼すると、ようやく動き出してくれたが、何やかやと言って、外に連れ出される。理由を聞くと、どうやら「電気が点かないので、何がどこにあるのかわからない」ということだった。いくら電気が点いても、絶対分かるわけがない。資料と思しき紙が山積みで、ファイルもされておらず、どこに何があるとどうしてわかるというのだろう。その場の担当者は、またすぐに同僚と世間話を始めていた。筆者が待っているのを忘れ去っている。再度「探してくれたのか」と話し掛けると、ふと我に返ったように別の人に見つかったかどうかを尋ねてくれたが、無かった。何の資料か不明だが山積みされた紙の束は、雨風にさらされ茶色く変色していた（壁の上部は風通しのよいように金網であった）。最新の国勢調査は20年前のものであった。

### 3) ルールを覆す富裕層

ある日筆者は、政府の資料を求めて中心街に出たが、思わしい収穫はなく、自転車の「リキシャ」に乗って、センターへ向かっていた。その途中に、ヤムナー河にかかる全長1km以上の壊れそうな凹凸の激しい橋がある。イギリスの植民地時代に建てられた2階建てのインド南北を結ぶ重要な橋である。上は鉄道、下が車道で歩道はない。日常的にトラック、バス、乗用車、リキシャ、自転車、牛の群れで渋滞しその合間を巡礼の行列や人が通っている。1km少しであるが渡り切るのに2～3時間かかることも稀ではない。

この橋を規制以上の荷を積んだトラック

が無理矢理渡ろうとしたところ、荷物が橋の欄干に引っかかり、それから後の車は足止めになってしまった。筆者は強烈な直射日光と凄まじい排気ガスに疲れ、交通整理が済むのを待っていた。その時、前から逆走してくるオートバイがあった。交通ルールを無視しての暴走であった。にもかかわらず、オートバイの運転手は横柄な態度で、自転車（リキシャ）こぎの若者に向かって、「道をあけろ」と叫んでいた。リキシャの若者は応酬していたが、リキシャの車輪にオートバイをぶつけられ、蹴られて結局道を譲らざるを得なくなってしまった。オートバイの運転手はリキシャの若者を睨み付け、ひどい言葉を吐きながら消えていった。オートバイは、日本でいえばスポーツカーのようなもので、金持ちのシンボルなのだ。それに対してこちらはしがいないリキシャこぎである。正義はあるのかと憤りをおさえられなかった。リキシャの若者は片手の障害者だった。

金持ちや権力者が行った不正は正義となり、嘘は事実として扱われる。何も持たない人は何からも守られない。

### 4) 自己都合を主張する人々

筆者とPMとセンターのスタッフ達、計4人は査察のため車で村へ向かっていた。その道はアスファルトで舗装されている、いわゆる「高価な道」であったが、凸凹で筆者はいつものごとく頭を車の天井にぶつけて揺られていた。その時、前方に大きなトラックが道をふさいでいるのが見えた。車は両車線をふさいでいた。すさまじい車のクラクションにもかかわらず、運転手は車を降りて何かを叫んでいた。「トラックの荷物を盗まれた、その荷物が見つかるまでは俺の車は動かさない。俺のトラックなのだからどこに置こうが勝手だろう」と叫ん



でいたのであった。そのトラックのために、後方には長々と車の列ができ、全ての車がクラクションを鳴らし続けていた。その道は都会につながる唯一の道である。自分の行為が人の迷惑になっていると分かっているにもかかわらず、あんなに頑として動かさないあのドライバーの強さはどこから出てくるのであろう。

アラハバードからバラナシへ行くバスでも若者と中年男性が大声で激しく言い争っていた。お互い、蒸し暑いので窓を開けたいが、若者が窓を開けると、中年男性のところの窓が閉まってしまう。窓を押し合いへし合いし、ののしりあっていた。乗り合わせた軍人が仲介してお互い譲り合って窓を開けることになったのだが、何事においても全力で立ち向かっているように感じられた。非常にエネルギーである。

## B 宗教観の違い

### 1) 宗教とカースト制

インドにおいて宗教は生活の基盤であり、社会組織であり、アイデンティティである。一般的な日本人の宗教観とは異なる。筆者は、インドでキリスト教が信仰されているところには、カーストによる差別はないのではないかと思っていた。しかし実際は現地の慣習に従って理解されていた。神の前では、カーストの中での平等は保障されても、カーストを超えての平等はなかった。またダウリー（持参金）を容認しているところもあった。

アラハバードにおいても、村人の集まる教会と大学生や大学教授の集まる教会は異なっていた。ステイタスのある者は村の教会に足を踏み入れようとはしない。

### 2) 汚染された聖地

ヒンドゥー教の聖地の一つであるサンガム（ガンガーとヤムナ川が合流する土地）を訪れた。そこにはハンセン病にかかった

人々が、並んで体を清めていた。水を入れるためのボトルを販売しているパラソルをさした店（屋台）がたくさんあった。人々は、その水を汲んで持ち帰り病人に飲ませるらしい。聖水で病気が治ると信じているためである。しかしそれは茶色く濁っており聖水とは程遠いものに見えた。以前は、ヒマラヤから流れる清流であったらしいが、現在は工場排水で汚染され大腸菌と赤痢菌が多く含まれた水になってしまっている。それでもありがたく押し戴いて帰っていく。心身共に祈りに生きる人々なのである。

## C 死と向き合う

### 1) 医療

筆者の訪れた診療所はとても暗くて不衛生であった。病室の廊下には落ち葉や使用済みの包帯が散らばり、まるで監獄のようであった。医者は診療代金を支払える人しか診察しないのであろう、病室の前でうずくまっている人がいた。救急車も長く放置されているらしくタイヤがパンクし、埃をかぶっていた。金持ちは助かり、貧乏人は死ぬ。歴然とした貧富がここにある。

インドの医療制度では、貧困線以下の人々は、無料で診療を受けることができる。とされているが、地方の診療所の医療水準は低く、物品も揃っておらず、機能しているとは言い難い。私立の診療所にかかるには費用が高く、特に貧困層の人々が利用できるものではない。貧困層・社会的弱者が母子保健、公衆衛生サービスを受取るのは難しく、予防可能な感染症にも罹患している。農村地域の村人が頭痛、発熱、病を発症した際に頼るのは、医療従事者としての訓練を若干受けたことのある指定カースト出身のオージャという治療師であることが多い。

インド医療中央委員会は医療に関する法

を制定し、医療へのアクセスをより充実させるよう試みているが、人口の27%に過ぎない都市地域での治療サービスに国家の保健分野歳出の75%が費やされていることは、医療サービスの公平性を欠いている。

## 2) ダウリー殺人

病院から数十メートル先には火葬場があり、そこには数名の男性が集っていた。彼らは検死体の結果を待っているのである。最近、ダウリー目的の殺人が増えているため、検察官がその妻は他殺か自殺かを検死しているのである（2007年には年間7000件と報告されているが氷山の一角に過ぎない）。

しかし、お金を握らせれば黒が白に容易になる世界である。夫に殺されたとしても、どれだけの女性が他殺と判定されているのだろうか。「どうしてあなたがたのように若い男性の妻が簡単に死んだりするのか」お

しゃべりをしながら検死を待っている男性に問い掛けたかった。

## D 牛の糞からエコライフ

前述した裕福なインド人スタッフMの家を覗かせてもらった。御殿といわれる家の庭にはインド政府が推進している自家ガス装置があった。牛の糞に水を加えてペースト状にし、それを土の中に埋められたタンクに流す。タンク内の菌が、糞を分解して熱を発する。それをガスとして使うのである。政府も奨励しているが成功例は少ない。彼は15年掛かりで成功させた。自分の家でガスを作ると言う事で、政府は150ルピーの援助金を出している。

2001年時は、電気使用世帯は44%、燃料として牛糞と薪を使用している世帯は53%であった。牛糞は家庭用燃料であり、磨き粉や洗剤、薬にも使われている。インドの太陽エネルギーとこれらの有機的な燃料の利用価値はもっと認められるべきである。